〔書評〕

外村彰著『岡本かの子の小説《ひたごころ》の形象』

北川健二

本論考は、著者が一九九六年から二〇〇五年の一〇年間に発表された論文、学会発表をまとめた「第一篇」「第二篇」と、それらの作品論を通して岡本かの子文学に流れる底流を読み解き、そこにひとつの物事に執着する生き方、すなわち「ひたごころ」を見出したとする「序説」。全集未収録作品などを集めた「第三篇」、それに「岡本かの子読書・言及年表稿」から成る。

第一篇第一章で、著者はかの子の初期童話、特に全集未収録の「赤とんぼ」「秀子の人形」「テスの話」について言及している。「赤とんぼ」では赤とんぼを追いかけているうちに失くしてしまった帯を赤とんぼに教えられることによって、「道徳的な自制心と愛育心を自得する精神的成長を招来」させたとする。「秀子の人形」は大切にしていた人形の「君ちゃん」を、人間との区別をする術を知らなかった秀子が川で洗ってしまい、土でできた「君ちゃん」は溶けてしまう。その結果、秀子は人間の赤ちゃんのほうが好きだと気付く。著者は「三歳から七歳頃の幼児の日常における心的変化を追うことで、読み手に正しい愛情の向け方を感得させようとした作」だと見る。「テスの話」は力も権威も持った犬のテスが、その境遇から傲慢になり、ついには病気で目の不自由な雌犬にひどいいたずらを仕掛けるが、雌犬の正直で疑うことを知らない態度からテスは自己を省みる契機を与えられるのである。これらの初期童話を著者は「大正八年から十年までの諸作には、仏教の影響を受ける前の、内発的な作者の資性が包含されているとも考えられる。あるいはこの文学的助走期に表現されていた何らかの個性的原資が、晩成期のかの子文学にあってなお通底している可能性」を指摘し、このことからかの子文学で語られる「煩悩即菩提」の構想が「初期童話に見出された「迷妄の浄化」を基底としており、のち仏教思想を契機とし深化拡大されたものと考え」ることの可能性を示唆する。

第二篇では「花は勁し」「金魚撩乱」「みちのく」「河明り」「渾沌未分」「東海道五十三次」の六篇の小説の分析・考察を行っている。

「花は勁し」の主人公三保谷桂子は絵画を学んでいたが、二二

歳の折に描いた「理想画」の「白牡丹」を同門の小布施から罵られることにより、絵画を捨て華道に取り組む。後にこの小布施の言葉は批判からではなく「カンヴァスの上の絵画を超えた野心」を感じたがためのものであったことがわかる。著者は小布施のいう「野心」を「自己の生命力の理想的表現」が桂子の芸術家意識を貫徹する「主観」であるとして、作品に現われる幻覚を「彼女の生命力のあらわれの一端」だとする。著者はこの「野心」を作中にも描かれ、かの子の『仏教読本』でも言及されるバルザックの「知られざる傑作」に注目して考察を加える。ここに描かれる老画家は、傑作と自負する絵を理解されずに自殺してしまう。この時点を桂子が「白牡丹」を描いた時と同じ状態とし、そこには「空」観を獲得した、すなわち悟りを得た姿がとらえられているとする。そのうえで著者は自らでしか知覚できない「空」の世界を万人にわかるように表現するため、桂子は「花」を選び、その表現手段の追求に一六年の歳月を費やしたのだとし、その完成の姿が生け花の展覧会の成功だと見る。さらには作品の最終場面での桂子の花体への変容をとらえることにより、この作品を「「白牡丹」の絵に存する「空」を「成長開花」させるべく花に「三昧」した桂子は、自己の「生命」そのものの表現を前衛的な生け花展で成就させたと考えるのである。桂子はそれにより「分陀利迦」という彼女の「生命」本来の姿になって、彼女を支える巨大な花の「生命」と一体化したのである」と捉えている。

「金魚撩乱」についても著者は同じように仏教面からのアプローチ、すなわち「かの子の独特な世界観・生命観を基礎にすえた見解ではなく、仏教を基底として作品の奥行きを「読む」」ことを試みる。そしてまず「金魚撩乱」の成立に『読売新聞』に掲載、七つの霊験説話から成る「新神秘主義」の中から、典拠が発見されていないことからかの子の創作である可能性が高いとする「大仏と小仏師」が関係しているのではないかと推定する。そしてその二つの作品を比較し、構成、人物形象、そして結末部の描き方と「金魚撩乱」が「大仏と小仏師」に照応することを導き出す。

この霊験譚を基に「金魚撩乱」が描かれたとする説により、真佐子に象徴される理想美を金魚で作り出そうとする「煩悩」が、真佐子の美を超える金魚として生み出されたとき「菩提」に転じるという「寓意性」を復一に読み取り、「復一は大乗的、真佐子は小乗的な生きかたを仮託されていた」とする。

さらに著者は「金魚撩乱」をかの子が「煩悩即菩提」と解釈した「維摩経」との関係で論じていく。それは「この世の万象に実体はない、つまり「空」とみれば、「煩悩」(迷い)も「菩提」(悟性)も、分け隔てできない」とする考え方で、「「菩提」の境地と最高の芸術美からうける恍惚感は同じ」とするかの子にとって「真摯な「煩悩」によって生み出される理想の美は、そのまま「菩提」を内包」するのだと考える。

この二作品における仏教性を理解するうえで重要になるのが、第一篇第二章で論じられているかの子への高楠順次郎の仏教観からの影響であろう。「もちろん、若年から歌を詠みつづけた詩人

かの子の資質と、事業にも熱心な学者・教育者だった高楠の芸術へのスタンスには懸隔もあろうが、大正から昭和初期におけるかの子の芸術的転換期には、これまで知られていたよりも深い高楠からの感化が認められる」とする著者は、高楠の現世での平和達成には「男性的な「力の世界」」ではなく、女性的な「愛の世界」すなわち「慈愛による世界の理想化」こそ必要だとする考えや、「理想の実現、理想の獲得に最も力あるものは文芸」だとする見方を理解し体現したのがかの子であったとする。

以下「みちのく」では、四郎を仏弟子の周利槃特にたとえ、その純粋で一途な思いがお蘭の玉の緒を曳いたのだとし、その「待つ」姿が時代性を持ちながらも描き方によって時代を「諷刺」もしているとする。「河明り」は、我執を開放する場としての「南洋」に焦点をあて、日本の「南進政策」への追随の可能性を示してはいるが、そこには三人の関係から作家である「私」への「かづけ」、さらに文学による「悩み」の再生産の機能も語られる。ここから「「河明り」の構想には文学と宗教を融合させる志向が内在していたと傍証できる」とするのである。「渾沌未分」では、D・H・ロレンスからの影響に言及し、地上、水上そして水中と場によって小初の心情がどのように変化しているかをとらえ、水中の「渾沌未分」の世界こそが小初の「「生命」的な領域」だとしながらも、小初が未だ「「歓び」の境涯」にはなりきれていないことを論証し、そこにあるのは「意志的な運動」にすぎないとする。いにしえから日本人の憧れの地であった京都につづく道としての東海道を、その終着地まで到達しない旅を続ける作楽井を、同じく東海道を夫に連れられ旅する「私」の目を通して描いた「東海道五十三次」。著者は作楽井の京都への憧れを時代に則して「終ることのない祖国愛の精神が持続する様態の隠喩」と見る。そして「私」の息子の作曲と作楽井とその息子である小松の関係を「自己表現の実現への事業の継承」だとする。そこに「事変下で作者が提唱した「三代に亘る長期の建設事業」の人的形象化ともなりえた。逆説的なかたちで同時代を象徴するような作楽井たちの生は、この時代における「幸福」追求者の典型として描かれたのだとしている。

これらの作品論により導かれたものをつらぬくものとして、著者は「序説」を書き下ろしている。ここで著者はかの子文学の評価史を概観したうえで「さて、かの子文学から一読者としての筆者が特に親しみを覚えるのは、その小説の多くに、何か一つの物事に執着する情熱的な人間が登場するところである」と語っている。これこそがかの子文学を研究する著者の立脚点だといってよいだろう。このことをかの子自身の言葉を借りて「一向ごころ（ひたごころ）」と呼んでいる。「ひたごころ」とは、理想や憧れに一心に取り組む姿であり「止むに止まれぬ熾烈な情念の謂」だとする。この「ひたごころ」こそを「かの子文学の大きな特質」と位置づけ、かの子の「煩悩即菩提」すなわち「この世の万象に実体は無い、つまり「空」とみれば、「煩悩」（迷い）も「菩提」（悟性）も、分け隔てできない」という仏教観によって、「「煩悩」

にとらわれていた人間が、ある「因縁」を介して「真実を覚る」」のだという。そのうえで著者はかの子が作家として活躍した「時代」を重要視し「かの子の仏教観、あるいは人間性には、当時の「全体主義」ないし「民族主義」に通ずる脆弱さ」を内包していたことを示唆している。

著者はかの子の多くの資料を丁寧に読み込み、整理し、原書を確認することにより「第三篇」となる資料の紹介を行っている。一九七四年に刊行された冬樹社版『岡本かの子全集』では、一九一九年雑誌「解放」一二月号に掲載された「かやの生立」を「かの子の文字通りの処女小説である」と紹介していて、それが岡本かの子研究では通説とされていた。しかし著者は、「かやの生立」以前に一九一九年一〇月には「赤とんぼ」、同年一一月には「秀子の人形」が「良友」誌上に掲載されたことを確認し「良友」を実見、全集未収録資料として本書に提示してくれている。これは岡本かの子の〈処女作〉を溯る文学史的発見であるとともに、今後のかの子文学を研究するうえでの貴重な資料となるであろう。その他三五箇所に及ぶ「全集」が未見としたような資料を探し出し掲載している。また「実業之日本社版全集「付録」」についても、現在全国の図書館で確認できるものをすべて調べたうえで「跡見学園女子大学短期大学部図書館所蔵」と「明治大学和泉図書館所蔵」のみであることを報告しており、その丁寧さと努力に敬意を払うとともに、「解題」で指摘されているように「最後の五十頁ほどは、永眠後草稿として残つたのを、一平氏が編纂されたもの」だという亀井勝一郎の「『生々流転』について」を発掘し、かねてから議論の対象となっていた岡本一平による改稿への言及として貴重な証言を見出している。さらに「岡本かの子読書・言及年表」は日記が現存していないかの子の「読書経歴を、年表形式にし」たもので、文章や書簡などから丹念に拾い出し、「既読の事実を推測」することから成り立っている。

著者は「「永遠なるもの」という「理想」に到達するしないにかかわらず、一心不乱にそれを求め生きる、そのような安心のない一途な「煩悩」に人間存在の尊さを見出すことが、著者なりのかの子文学への変らない評価軸である」としている。本書は著者の実証主義的手法に基づき、丁寧に作品を読み解き、かの子の言説や具体的な仏教の経典を通して解釈を深め、時代性と照合しながら、かの子の人間存在への信頼を描き出すことによって、現代社会が今なお持ち続けている勝者と敗者という二項対立の図式を打ち破るものとしての「ひたごころ」の可能性を提示してくれているのである。

（きたがわ・けんじ　立命館大学研修生）